

## 第二百六十五話 特攻の成功率は？

特攻の成功率・撃破率等を論じることは、作戦としての特攻を是認するものであり不謹慎であるとの誹りを受けかねないが、その意はない。特攻が統率の外道であることは疑いを容れる余地はない。国家のため、愛する者のために一身を擲って散華した若者の烈々たる熱誠に心打たれない者はいない。それは所謂自爆テロとは断じて同じではない。

### 1 特攻の成功率把握法

効果判定は、大本営、戦史叢書、米国戦略爆撃調査団統計があり、これらのデータを駆使して、色々な成功率が示されて、統一の見解はないようだ。ある研究者は、命中率は次第に低下し、沖縄戦においては、約7.9%に低下していたと算出している。

### 2 米国戦略爆撃調査団資料

有効率：フィリピン戦＝26.8%、沖縄戦＝14.7% 通算＝18.6%

### 3 戦史叢書のデータ

戦史叢書では奏効率＝命中又は有効至近命中/特攻実施機数を用いて次のように算定している。

フィリピン戦～硫黄島戦＝27.1%、沖縄戦＝13.4%、通算＝16.5%

### 4 大本営

大本営は、沖縄侵攻連合軍艦艇の60%を撃沈又は深刻なダメージと判定

### 5 評価

- (1) 大本営のデータは別として、戦史叢書、戦略爆撃調査団資料の成功率は近似しており、妥当なものなのだろう。
- (2) 特攻開始直後の戦果に比して、次第に成功率は低下してきた。その要因は、米海軍の対策の向上（早期警戒網の構築、輪形陣による対空防御、対空射撃技術(CIC、VT信管)、日本搭乗員の練度低下(熟練搭乗員の損害大、速成搭乗員の技量不足)、特攻機の性能低下(偵察機・練習機・旧式戦闘機等が3割)である。
- (3) 空母や戦艦の撃破率等  
米軍艦艇の艦種別撃破率は以下の通りであると云う。  
『正規空母、軽空母：撃沈0、撃破26、護衛空母：撃沈3、撃破18、  
戦艦：撃沈0、撃破15 駆逐艦：撃沈13、撃破109、  
その他の艦艇：撃沈7、撃破65、 上陸用・輸送用：撃沈24、撃破54』  
重要艦艇の撃沈・破は僅少で、防衛作戦に寄与したとは言えるのか？
- (4) 急降下爆撃と特攻の命中率  
急降下爆撃の被弾した米軍側の資料に比して、日本軍はかなり過大に評価していた。が、それなりの成果を挙げていた。(珊瑚海海戦 日本側：64%、米側9%)  
熟練搭乗員の損耗は、急降下爆撃に任じうる搭乗員の減少に直結し、遂には特攻が唯一の戦法となった。
- (5) 特攻機は、大型艦に対しては貫徹力不十分であると認識されていた。
- (6) 特攻専用機「桜花」



母機となる一式陸上攻撃機に抱えられて離陸、目標の近くで切り離してロケットに点火し、一直線に敵艦を目指す特攻機。1.2トンの爆弾に翼と操縦席とロケットをつけ、それを人間が操縦して敵艦に体当たりする超小型の飛行機。実戦使用。

- 6 十死零生と言われる航空特攻の戦死者は約4000名(海軍：2,531名、陸軍：1,417名)である。一死をもって国や愛する者を救わんとする壮絶なる想いの下散華された英霊に対し、敬意と感謝の念を捧げるのが人の道であり、永遠に顕彰されるべきだろう。

(了)